

大田昌秀さん追悼

悲しい知らせである。朝日新聞 6 月 13 日朝刊。リードから一沖縄戦を経験し、生涯、反戦を主張し続けた元沖縄県知事の大田昌秀さんが亡くなった。米軍の基地問題を訴え、知事時代は国とも激しくぶつかった。志半ばで逝った 6 月 12 日は、大田さんの 92 歳の誕生日でもあった。

12 日、病室に家族や琉球大教授時代の教え子ら 5、6 人が集まり、ベッドを取り囲んでいた。午前 11 時半からの誕生会。主治医や看護師も一緒に「Happy Birthday」を歌う様子を、目を輝かせて見ていた。歌が終わると、すーっと眠るように息を引き取った。

同日「天声人語」から。

沖縄戦が始まった 1945 年 3 月、地元の学徒たちが急きよ集められ組織されたのが、鉄血勤皇隊である。きのう 92 歳で亡くなった大田昌秀さんもその一人だった。伝令の任務を帯びて移動している最中に、米軍機に狙われた▼

近くの防空壕に逃げようとするが、なかにいた味方兵士から銃を向けられた。「誰かここに入れといったんだ。出て失せろ」と怒鳴られたと自著にある。日本軍の兵士が県民を守るどころか死地に追いやる。戦後、沖縄戦の研究を続けた大田さんの原体験なのだろう▼

学者から沖縄県知事に就いていた 1995 年、米兵による少女暴行事件が起きた。「本来一番に守るべき幼い少女の尊厳を守ることができなかった」と語って、県民にわびた。基地縮小を求め、日米両政府と対峙し続けた▼

基地返還の代わりに、名護市辺野古沖での海上基地建設が政府から示された。しかし、首を縦に振ることはできなかったと書き残している。「私を引きとどめたのは、沖縄の歴史の重さだった」▼

多くの人がみじめに死んだのを見てきた。命を落とした一人ひとりの重さを、学者として政治家として引き受けようとしてきた生涯だった。知事時代の仕事に「平和の礎」の建立がある。石板に県民や兵士ら 24 万人余りの名が刻まれている▼

二度と沖縄に惨事を起こさせないと何度も語っていた。「基地のない沖縄を」という大田さんの思いはいまだ遂げられていない。だからこそ向き合わねばならない。重い問いかけである。



(2017 年 6 月 15 日)